

560 鳥居締次郎君逝く

〔「法学新報」第29巻7(332)号 大正8年7月1日〕

○鳥居締次郎君逝く 君は明治二十一年首席を以て中央大学の前身たる英吉利法律学校を卒業したる俊才にして翌年弁護士試験に合格し弁護士と為りて居を新潟に定め名声遠邇に隆隆たり其業務に忙殺せらるるに拘はらず傍ら県政並教育事業に尽瘁して効績の見るべきもの多し君生来蒲柳の質なれば劇務の爲めに痛く健康を害したるを以て諸友の勧告を容れ大阪地方裁判所検事に任し在職数年ならず斬然頭角を顕はして上下の信頼する所と為りしも其健康の旧に復すると共に此小天地に踟躕するを肯んせず官を辞し東京に出て悠悠講学に勉めて大成を期し又母校

の爲めに大審院判決録及法学新報の編纂に助力したり然れども
幾くもなく此境遇に在るを許さざる事情突発したる爲め再び起
て新潟に赴き弁護士の業務に従事し復た県議員と爲り県教育
会長と爲り衆議院議員と爲り憲政会内閣成立するや内務省副参
政官に挙げられて亦令名あり大正五年十月内閣の更迭と共に三
度新潟に帰て弁護士と爲り選まれて会長に就任し実に政法界に
於ける地方の重鎮たり昨冬偶々流行性感冒に襲はれ肺炎を併発
して漸く重体に陥り去五月二十五日五十三歳を一期として終に
易簣せらる君は越後国村上藩に生れ資性恬淡友誼に厚く頭腦明
晰加ふるに勤勉倦むことを知らず言論文章に工みにして又詩歌
俳句に長す即ち人格の人にして又才芸の人たり君の三度新潟に
帰るや同人皆捲土重来の遠からざることを期待せしか昊天甲ま
す俄に斯人を奪はる追憶再四温容恍として尚ほ目睫の間に髣髴
たるを覚ゆ嗚呼哀哉（佐藤正之記）